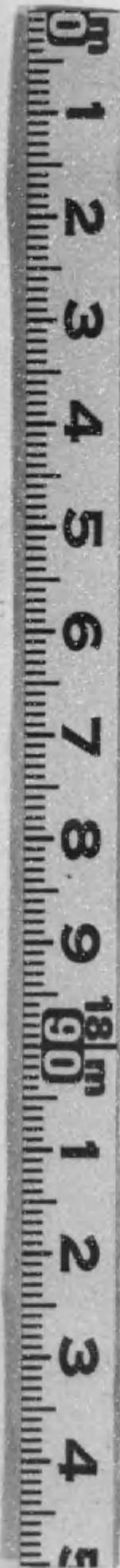


特 113

492



始



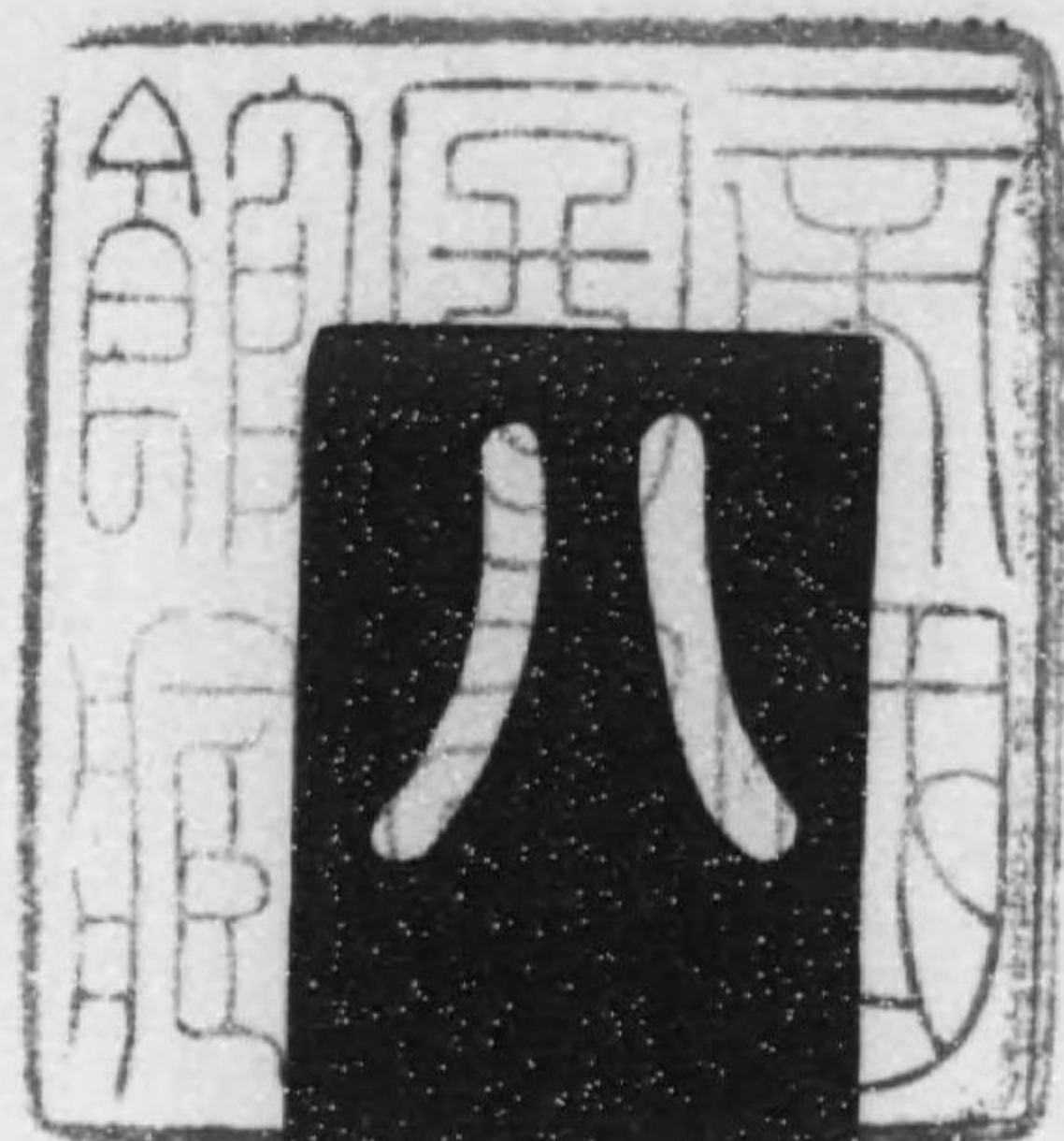
家

梅原眞隆

特113

492

147113
492



人

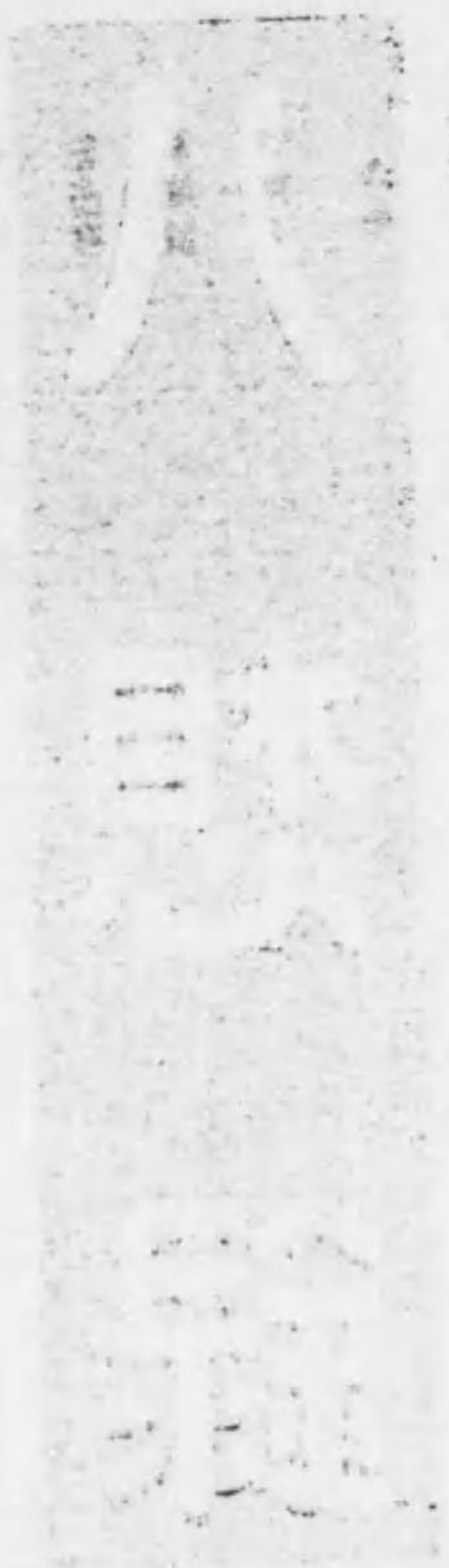
想

録

大正
15. 10. 1
内交

大

三
三
三



發刊のことば

本書は思想界唯一の宗教新聞であり、教界唯一の思想新聞であるわが中外日報が、創刊三十年八千餘
記念として、生れ出た「八想錄」の一編であります。記念出版といふことも餘りに月並みで鼻につく
やうであります。本出版の如き執筆の諸氏は、現代の思想界に、教界に、はた學界に、各獨自の天地
を占有される一人者たるは言を要しません。しかもその内容に至つては、期せずして一致した奇蹟な
る題號と共に、奇聞、傳説、趣味、好事、さては肩の凝らぬ考證もの、思想批判、社會評論より、す
つきりしたエロチツクな話など、何れも天下一品の偉觀であります。

今や堅くらしい論説や研究には胸がつかへ、それとて文人筋の文藝ものにも飽き／＼してゐる時、
本書の如き盡きせぬ興趣源にヌラ／＼と讀破し得て、しかもそこに何物かを把握せしめねばおかし
なこと、たしかに重寶ある財源と自覺するのであります。

大正十五年夏

中外日報社

家

梅原眞隆

八想錄

全八冊・每冊六十八頁以上
一冊・金拾錢・送料金四錢

紙○物道女家入血

石川	西田	近重	萩原	高島	梅原	曉島	足利
日出	天香	眞澄	井泉	米峰	眞隆	烏敏	淨圓
鶴丸			水				

内 容

愛欲の象徴	一
出家の清規	九
無碍の白道	一七
鏡池の葦笛	二五
下妻の夢想	三三
久遠の家庭	四〇
太子の誄歌	五三
聖化の内観	五七

△眞實は光る▽

内 容

愛欲の象徴

愛欲の象徴

この世が破壊せられた、成住壞空の法則によつてこの世がすっかり破壊せられた。その世界の破壊するとき、衆生は晃昱天に生れかほりました、生れかほつた衆生はいつしか微妙な形色と意識とが賦與せられ、すぐれて整ふた形體をもつて居りました、その衆生はこゝろから微笑まれる「喜」といふものを糧として居りましたので、各自の身體から光明を放つのでありました。礙りのないひろくとした虚空に逍遙して、淨らかな境界に悠久の生活を享有して居りました。

そのうちに虚空の底に水がたゞえられました、その水のうへに風が吹いてかきみだすうちに、水が結晶して白げられたやうになり、それが合聚し和合してこれより「地味」を生じました、かんばしい色と味があらはれました、それは生蘇と熟蘇のやうな色を呈し、蜜のやうな味を帯びて居りました。これ還元の期

である。ひとたび破壊せられた世界はふたたび構成せられたのであります、曾て、晃昱天に生れた衆生は天界の果報がつき、人間として大地に下生しましたがけれども、その形體も意識も乃至喜を食することも、身より光明を放つことも、天界のまゝで、變化はありませんでした。

原始の世界はすべてが未分の純一状態でありました、日月もなく、星宿もなく、晝夜もなく、月の半満もなく、時の分別もない、更らに亦た、父もなく母もない、男もなく女もない、支配する大家もなく支配される奴婢もない、たい何等の分化も差別もない、たい、「衆生」があるだけでありました。

ふと、ひとりの衆生が一種のあたらしい食慾を内感しました、これまでのやうに「喜」を食ふことをうち忘れてしまひ、いつしか地味にひきつけられ、指をもつて地味をかきあつめて嘗めました、地味はおいしいので貪りかけまし

た、指でかきあつめる位では物足りないので、兩手を以つて地味をすくひとつて食ひはじめました。すると、たくさんの衆生はそれを見習つて、各自が兩手に地味をすくひとつて貪り喰ひ、みんなは結構なことであるとおもひ、且つこのろよく感じるやうになりました。

ところが、これまでかるい透きとほるやうな清淨であつた衆生の身體は、いつのまにやら厚くなり、重くなり堅く變化し、その身體から放つてゐた光明も消え失せて、この世に「闇」が生じました。すると、みる／＼世界の光景がかわる、すなはち、闇ができるとそれを照らす日月ができます、日月ができるとそれを繞る星宿ができる、またおのづと晝と夜とがわかれる、半月と満月とができる、時と歳とが分別されます。自然の大地を食としたとき、自然の法則に支配せられなくてはならなくなつたわけであります。

天地が分別されると共に衆生も差別されることになります、即ち、地味を食ふことと多きものはみぐるしく、地味を食ふことと少きものはうつくしい、かたちの勝劣と美醜が差別されると、そこに衆生の間に輕侮と高慢とがあらはれ、あさましい經緯がさざしました、そのために惠まれた地味は滅びてしまつた、地味の滅亡したことに氣づいて、すべての衆生はみんな悲しみ啼いて地味をもとめなければ、もはやおそい、ふた／＼地味はめぐまれないで、その代りに「地肥」が生じてきました。

この地肥は地味に似て、その粗重なものであつたらしい、衆生は地肥を食ふことになりましたが、ふた／＼地味の時代とおなじ經緯をくりかへして、娑羅の時代に入りました。これには、曇華のやうな色と淨蜜のやうな味があつた、この娑羅の時代にもまた同様な經緯をかさねて、自然粳米の時代にかはりま

した、粳米は白淨で皮がない、また麤糲もない、長け四寸ほどあつて、朝に刈れば暮に生じ、暮に刈れば朝に生ずるといふありさまである、熟すると鹽味を帯びるが生氣はなくなつてしまふ、衆生はこれを食することになりました。

ところが、この粳米を食することになると、衆生に男の形と女の形とが分化されてきました、最初のうちはあさましきもの、見ぐるしきものとも叫いて惡み合ふたけれども、いつしか相見てこゝろひかれることゝなり、愛著し合ふことになり、しまいには抱擁するに至りました、最初、この男女のみだらな抱擁の姿を目撃して、木石を以つて、杖塊を以つて、打擲しながら、あさましきもの非法の事をなすと言ひつゝけた、而して、この不淨の抱擁をあさましく感じ、羞耻するものは大衆とはなれて生活することゝなり、この抱擁を行はんとするものは「家」をつくつて、かくれて行欲をなすに至りました。

「若有衆生、欲得行此不淨行（性交）者、彼便作家、而說作是說、此中作惡、此中作惡、是謂初田初緣、世中起家法」つまり、家は性的抱擁をつゝみかくすためにつくられたものであるといふ意味であります。

これは中阿含經第三十九卷、梵志品娑羅婆堂の一節にしるされた傳説であります。

合つまり、この阿含經の傳説は家は淫欲の所作を掩ひかくすために、構造されたものであるといふことである。これは意味ふかい見方であるとおもはれますまことに「家」は愛欲の象徴であります、本能生活の核心に根ざしてかたちつけられてあるのであります。それゆゑに、この家は人間をひきつけるものもなしい、またこの家はごちからづよい繫縛もありませぬ。いちばん、懐かしい情味のこもつたものであつて、そのまゝ、いちばん懐しい苦惱のたねであります。

詮するところは「家」は解けがたい謎であります、この謎のなかに渦巻かれて、大地に生けるものが、どれだけの涙をながしてきたことかわかりませぬ、またどれだけの愛執を感じてまよふてきたことか知れませぬ、「家」は大地にころがつてゐる数おほくの謎のうちで、いちばん解けがたい謎であります。

出家の清規

愛欲に溺れて、無反省にふざける獣のやうな生活をくりかへしてゆくうちは、生命の伸びることはありません。生命の伸びることもないかほりに、深刻なやみも感じないのです。けれども、人生が聖なる光を蒙つて、まことの生命が芽生えかけるときは、愛欲のいきさつをかなしみます、愛欲はかなしい煩惱の核心であることに気づきます、この愛欲の煩惱にひきづられて、はてしもない迷ひをくりかへさねばならぬ流轉輪廻を傷むのであります、「恩愛はなはだちがたく、生死はなはだつきがたし」とは敬虔な聖者のなげきであり、諦観でありました。そして、かゝる諦観のどん底にはすべての犠牲を支拂つても、まづこの愛欲から離脱しなくてはならないといふつよい聖求の道心がひらめいてくるのであります。かの出城の悉達太子が愛妃も愛兒も王冠も王城も、すべてをすてゝ山へわけのぼられたころもちには、ふかい聖求のころが光つて居ります。

ます。

そこで釋尊のみあとを慕ふた聖者たちのすべてが「家」を出て、山に入ること、を聖求の方途であるとなし、修道の清規とするやうになりました、煩惱を断ちきることが涅槃に到る道である、煩惱を断ちきることは愛欲を棄てることでなくてはならぬ、愛欲を棄てることは髪を剃つて家を出づる聖貧の生活でなくてはならぬ、かくて斷惑證理の聖求の實踐生活の方式は捨家棄欲といふことをえらばれたのであります。むかしから、道を修め聖を求める行者たちのことを「御出家」と稱するやうになつたことは、全くこの修道聖求の清規を云ひあらはしたのであります。かくて、宗教生活は出家得度といふことゝ同意語となつたのであります。

けれども、その出家といふこと、捨家棄欲といふことが、果してどれだけ欺

かないで徹底されるでありませうか。大地に生まれ出でたるものが、果して家は捨てられるか、果して欲が棄てられるか、形容としての出家はむかしからたくさんの人々によつて試みられてきたことであるが、果してその形容のどほりに内心まで出家しきることができたかどうか、かなり疑はしいことなのであります。「かくすは聖人、せぬは佛」といふやうな辛辣きわまる皮肉な觀察が行はれたほど、いたましい破綻のあらはれてきたのは、たゞ聖者たちの行持が緊張を缺いたといふだけのことでなくて、そこには大地に生きるものゝかなしい必然の制約を見忘れたゝめの破綻ではないでせうか。人間を取扱ふのに超人を取扱ふやうな清規を擬したところに無理がかゝつてゐるためではないでせうか、無理のかゝつたことはどうてい地上に於ける普遍の大道とはなりきらないのであります。家を捨て欲を棄てやうとする聖求のこゝろは、かぎりなく尊く光る

ものであるけれども、果して家は捨てうるものか、また、家を捨てねば聖化の救済がめぐまれないものであるか、この點についてふかい反省と聰明な諦觀とが必要とせられるのではないでせうか。かゝることをおもふとき、出家の清規は少くとも無理がかゝつてゐるやうな氣がいたします。

蓋し、家は人間生活そのものゝ本質に根ざしてゐるものでありまして、人間の生きてゐるかぎり、人間にあたゝかい血のかよふてゐるかぎり、とりのけたり、撥無したりすることのできない内面的を有するのであります、いふまでもなく人間は本能だけのかたまりではありません、理性のひらめくことこそ人間の人間らしい風格であるともまふされます、さりながら理性のひらめくといふことは、本能が拒否せられるといふことではなくて、本能をうけ入れつゝたかめられたものに外ならないのであります。それゆゑに、何等かの機縁に催され

若くは何等かの感激に迎られて家を出ても、いつのまにやら、蝸牛が殻のなかへかへつてくるやうに、ふたゝひ家にかへつてくるのであります、生活の實際が家にかへりながら、その形容が家を出たものゝやうに粧ふところから、偽聖の破綻に落入るのではないでせうか。

さらにまた考へねばなりません、「聖」といふものは「家」をどりのけなくては人生にめぐまれないものでありませうか。「聖」は絶對的な高次の統一性を有するかぎり、「家」の愛欲をどりのけなくてはならないといふものではなくて、寧ろ「家」を止揚するのではないでせうか。こうして、家の愛欲、人の煩惱を斷ずることなくして、聖化するところにこそ、すぐれた宗教の無礙の大道がひらけてゆくのではないでせうか。

尙ほ、思ひ切つて突つこんで考察してみると、家を出るといふことは果して

人生のまことの救ひをもとめる所以でありませうか、家を出て欲を棄てることは人生の否定であります、少くとも具體的な實人生を無視することになります。人生の苦惱を救済せんがために人生そのものを否定することは、疾病を療治するために人間を殺すといふことゝおなじ行方ではないでせうか。また、かりに人生を否定し愛欲を斷絶した證果といふものが、一種の高尙らしい觀念として愛玩されることがありうるにいたしましても、之れはどうてい、大地の活ける救ひとはなりきらないでせう、血のかよふた全人の落居すべき立場とはなり得ないかのやうにおもはれます。

こんなに、省察をかさねてみますと、出家といふ聖求の試みは、大地に生きるものとしては不可能なことであるといふばかりでなく、思ひきつていへば、人生の救ひといふ立場を見すてないかぎり、無意味なことになりはしないので

家

せうか。

出家の清規をたうといこと、虔ましいことであると、尊敬して居りながら、私はこうした疑問を有してゐるので、少くとも私の道として履踐することができないのであります。

無碍の白道

うちつけに、私のこゝろもちをさらけ出して無遠慮に云はしていたゞくことがゆるされるなら、私はこんなにおもひます。「家」を出でゝさとりすまそうとする古い聖求の道よりも、あるがまゝの人生をうけ入れながら「家」ぐるみに救はれてゆくあたらしい無碍の道こそ、ほんとうの救ひをしめすものであると深く信認してゐるのであります。言葉をかへてまうせば、人間を超えて悟をひらくといふ超人の達觀よりも、人間に還つて光をあふぐ還人の法悦が、少くとも大地の宗教として意味ふかいものであり、切實なものであり、また、深刻に人生にふれたものであると味ふてゐるのであります。

釋尊はうまれながらにして、一步を踏み出して天上天下唯我獨尊と宣説せられたといふことであります、これは大法の獨立と自全とをしめす權威の表象としてほかぎりなくどういものであります、「ひとりたちをさせて、すけをさゝ

ぬ念佛」の境地としては素直に領納もされます。けれども、六道を六歩に踏みやぶつた超人の宣言であり、捨家棄欲の原理をしめさんとする聖道的傳説としては、いくらか落ちつけないところがあります。それに比べては、ひとたびは家を出でゝ山に入りながら、ふたゝび山を出でゝ家にかへられた愚禿親鸞の還人の法悦と在家の宗教に親しみふかい感じをもつのであります。この比叡の山をくだられた親鸞聖人の轉回は宗教生活の逆觀でなくて、全き人生を荷負してかくわけ入られた深刻な徹底であると味ふべきであります。

尤も、佛教の迫れるみちをふりかへつてみると、淫欲卽是道とか、煩惱卽菩提とかいふ圓融の觀念や空觀の達解があらはれてきました、けれども、概念としての展覧はとにかくとして、實踐履修の行持としては依然として出家の型をうけついでたのであります、従つて、かゝる達觀は概念のうちに人生の謎を

解いたにすぎないので、なまなましい大地の現實から滲み出してきた生命の伸び方であるとはうけとれないのであります。

この點になりますと、「妻子を帶し、魚鳥を服し」ありのまゝの「家」といふ大地の謎をかい抱きながら、めぐまれた聖い生命を領得してまことの救ひを體感せられた親鸞聖人は、まことに深刻な試練をとげられた次第であります。賀古の教信の芳躅をしたひながら、非僧非俗の沙彌生活に安住して、ほれ／＼と彌陀の慈恩をよろこびながら念佛せられた愚禿親鸞は、何等の觀念によつても加工されないありのまゝの人生を立場として新しい萬人の救ひの道を開かれた開拓者でありました。私は親鸞聖人の無碍道には何等の無理もかゝつてゐないこととそのまま人生の内面にとり入れられること、而して、ふかい信心の智慧が光つてゐることを、ありがたく、いみじくおもふのであります。

云ふまでもなく、これまでの出家の宗教においても、うつくしい徳と、たうとい悩みとが、いちじるしく經驗せられてきました、私はそれを輕視したり忘却したり見おとしたりしやうとするのではありません。けれども、それら出家の宗教よりも、在家の宗教はもつと切實に、もつと眞摯に、もつとふかく生命の泉まで掘りさげられてあることをおもふのであります。

従つて、家を出て、山に入る聖者たちの修行よりも、山に入らずして家に住しながら佛を念じ、聖に交はる凡人の念佛三昧の境地には、更に深くして、さらに眞劔なこゝろもちが掘りさげられないと、ほんとうに在家止住の無碍道を味ふことができないやうにおもはれます。しかるに、在家の宗教が淺墓な人々によつて弄ばれてゐるために、この尊い宗教經驗をうつくしく味はれないばかりでなく、やゝもすると、際どいところで躓きとなることさへあるやうにおも

はれて、いたましく感じることであります。

家ぐるみの救ひ、凡夫さながらのおたすけ、それは人生そのものに無理をかけずにすべての人々が全體を領納し得る點において、易行の宗教であり、易往の大道であります。さりながら、家にあつて聖に道交することであるから、難信であり、凡夫のまゝで如來に攝取せられる念佛であるがゆゑに難信であるともまうされませう。家をすて欲をはなれた相對的な統一のみちよりも、愛欲の煩惱づくめのまゝ、家ぐるみに救はれるみちは絶對的統一であるだけ、深みもあり豊かさもあるわけですから、出家の聖者よりも、在家の凡夫こそ、ふかい信心の智慧なくしてはかなはないのであります。ふかい悩みとたかい光とのとりけあふた修道の工夫をわすれてはならないやうに感じられます。

かくて、複雑な純一と、平凡な神祕と、易往の難信とをそなへてゐる點にお

いて、出家の宗教よりも在家の宗教は、よりたかい統一と、よりふかい境地を内容とした宗教であります。横超の直道といひ誓願一佛乗であるとなぐえられた親鸞聖人のおことばは、すべての人々に根本的にこれまでの宗教を見なほさせる示唆ともなるかといいたゞかれます。

とにかく、今後の人生における宗教は家ぐるみの救ひを内容としなくてはならないことが、何人も欺けないことがであります。これによつて、愚禿親鸞の宗教はまことに大地の白道としてどこしなへに光ることでもあります。

鏡池の葦笛

家

わが親鸞聖人は「在家の沙彌」であらせられました、かの教行信證を選述なされた稻田の草庵はいはゆる聖者の「寺」ではなくて、凡夫の「家」でありました、教行信證を選述なされた元仁元年に末の「いやおんな」さまがうまれてゐなるといふことも、聖人の在家の宗教を味ふものゝ、細密に注意すべきことであります。

親鸞聖人が妻をめとり家をかたちづくられた心持若くは機縁はいかやうなものでありませうか、これについて、趣ふかい傳説がのこつて居ります。それは親鸞の配所なる國府の鏡ヶ池の片葉ノ葦の傳説であります。この傳説にはふかい情趣を掬ふことができるやうに感じられます。

親鸞聖人が越後へ配流せられて、國府に侘びてくらされたときのことである。ある日、聖人は五智の國分寺のちかくにある鏡ヶ池のほとりに逍遙せられた、

そして、ふと澄みきつた池水に映る御自分のやつれた姿を瞥見されたとき、そこに惱める自分の姿に出遇つたやうでひきつけられました、ほんとうの自分の姿を視つめたい、そして、それをモデルにして自分の手で自分の像を刻んでみやう、といふ氣分になられたのである、つまり、適確にありのまゝの自己をつかみたかつたのでありませう。それから、毎日のやうにこの鏡ヶ池の畔にゐんで自分の姿を水鏡にうつして視つめられた、すると、毎日のやうにその面影が變化する、或時は惱んでゐる、或時は楽しそうでもある、あるときは見苦しくあるときは尊くもみゆる、いづれが、ありのまゝの自分の姿であるか見わけがつかなくなつた、これこそ本當の自分といふものをはつきり見出したい、それを見出したときこそ自分で自分の像を刻みえらるときである、ごうかして自分の像を刻みたいと焦慮せられたのであります。ある日のこと、いつものごとく聖

人は池水の面にうつる自分の姿をちつと見つめてゐられると、何處からともなく、いひやうもない微妙な草笛の音が、静かな池にたゞよふてきこゆるのであつた、聖人はその微妙な音色にひきつけられて、おもはずその音のする方を眺めやられると、どこからきたのか、對岸のしげつた葦の間にひとりの美しい若い女が立つてゐる、につこり笑をうかべて、葦の葉を摘んでは笛にかへて吹きならしてゐる。聖人のこゝろはふかく魅せられたのであります、聖人の心はそれから動搖しかけました、それから誘はれるやうに池に赴かれた、それと同時に對岸には美しい女があらはれて草笛を吹きならすのであつた。そして、その草笛の音色はだん／＼やるせなくひびくのであつた、聖人は美しい幻影に眩惑しかけやうとするとき、いよ／＼自分の姿を視つめられました、笛の音色がやるせなくひびくにつれて、池水の面にはいよ／＼はつきり聖人の姿が現はれま

した。かくすること數日やがてこれこそ本當の自分であるといふものを見出されたとき、聖人の姿は池の畔に消えて、一軀の木像が聖人の手によつて刻まれました。そのとき鏡ヶ池の葦のすべての片葉は美しい女に摘みつくされて草笛になつたために、今でも片葉の葦に化けてしまつたのだといふ傳説であります。この傳説はふかい意味を孕んで居ります、それは美しい女の草笛によつて、祖聖の最も本質的な姿が曝露されたことを意味するものではないでしようか、換言せば愛欲にふれてありのまゝの自己が発見されたことを意味するのではないでせうか、更らにその自刻の木像とは實際は木像でなくて、愚禿親鸞の自覺と名告を象徴したものでないでせうか、そして葦の草笛ふける女こそ内室となられた惠信尼の象徴ではないでせうか。惠信尼は越後生れのお方であり、聖人の配流中に内室となつて御給仕なされたお方であります。

それはとにかく、この傳説の有する意味は人間についての自覺であります、人間の現實曝露であります、愛欲のまへに試練せられて聖人は現實の人間をなげ出されたのであります。聖人の妻帯は聖者の假面によつて欺ききれない人間の現實曝露に外ならないのであります、かくて聖人はいかにして愛欲を超越するかといふことよりも、愛欲の人間がいつに救はれるかについての徹底であります。かくて聖人は「愚禿の沙彌」として凡人性の自然に隨順しつゝ「家」に止住して本願の白道を辿られたのであります。

「われはこれ賀古の教信沙彌の定なり」といふ御持言はこの心境を示したものでありませう。こゝで念のために申しておきますが、「沙彌生活」とは平安朝の末期から教界の一部にあらはれてきたもので、妻子を帶し魚鳥を服しつゝ、つまり人間らしい生活をなしつゝ修道した一群の生活者であります、そして、

それは決して不眞面目なための聖者生活の破綻でなくて實は誠實な超越であつたのです。聖者生活はたゞ形式となつて、その半面は實にあさましく爛れきつて墮落したので、かゝる偽聖の生活を超越せんとした誠實な修道者が非僧非俗の沙彌生活をいとなんだので、いはゞ誠實な自由人の一群であつたのです、聖人の生活はこの沙彌生活を慕はれたのであります。「家」ぐるみの救ひを内容としたのが愚禿の沙彌生活でありました。

下妻の夢想

家

家にかへつて、妻子を帶し魚鳥を服し、凡夫さながらの生活で念佛まふされた愚禿親鸞を目して、豚のやうに安價な享樂にふけつたものと見あやまつてはなりません。十字架をはりつけられて血を流したキリストよりも、家を荷負して涙をながした親鸞の深刻なこゝろもちを視つめなくてはなりません。

この春、高田の専修寺に詣でて親鸞聖人の自筆の「淨肉食の文」を拜見して、魚鳥を服された親鸞の苦悶の象徴であると感じました。親鸞聖人のいのちをうちこんで選述なされた教行信證の信の巻に「愛慾の廣海に沈没」する身を懺悔なされた文字のひとつひとつが涙に濡れてゐることは誰れも氣づいてゐられるところでありませう。親鸞が家にかへられたのは、聖を慕ふこゝろの弛んだ所爲ではなくて、聖の純全なすがたを仰いでまかせきつたものゝ絶對歸依の姿でありました。それゆゑに、家をすてゝ山に入る聖者よりも、山を出でゝ家にか

へれる愚禿のこゝろの底には、よりふかく、よりつよく、而して、より純粹に聖化の信心が廻施せられてあつたのであります、在家止住の愚禿こそ、形容のうへの聖者よりも、もつと本質的に聖者であつたともながめられるのであります。愛欲の家に住して聖なる光照を蒙れる懺悔の涙こそ、いちばん低いところにひざまづいて、いちばん高いところにむすびつく契機でもありませう。凡俗の家のうちに聖なる光を慕ふ涙であります。

これによつて、愛欲の家にそゝがれたる懺悔の涙が、そのまゝ聖なる慈光に彩られてゆく聖化の神祕を孕んで居りました。これについて、思ひ浮べるのはあの美しい下妻の夢想であります。それは、西本願寺に傳來する親鸞聖人の御内室の惠信尼公が、越後にあつて、京の聖人の御往生をきかれたとき、かなしいこゝろもちで名残をおしみながら、その愛兒なる彌女さまにおくられた御文

書の一節にしるされてあります。

さて、常陸の下妻と申候ところに、境の郷と申ところに候しとき、夢をみて候しやうは、堂供養とおぼへて、東向に御堂はたちて候に、神樂とおぼへて御堂の前には立明白く候に、立明の西に、御堂の前に鳥居のやうなるに、横さまにわたりたるものに、佛をかけまいらせて候が、一體はたゞ佛の御顔にてはわたらせ給はで、たゞ光のまなか、佛の頭光のやうにて、まさしき御かたちは見へさせ給はずたゞ光ばかりにてわたらせ給、いま一體はまさしき佛の御顔にてわたらせ給候しかば。「これは何佛にてわたらせ給ぞ」と申候へば申人は何人とも覺えず、「あの光ばかりにてわたらせ給へ、あれこそ法然上人にてわたらせ給へ、勢至菩薩にてわたらせ給ぞかし」と申せば、「さて又いま一體は」と申せば、「あれは觀音にてわたらせ給ぞかし、あれこそ善信の御房

よ」と申とおぼへて、打驚きて候しにこそ、夢にて候けりとは思て候しか。さは候へども、さやうの事をば、人にも申さぬと聞き候しうへ、尼がさやうの事申候らむは、げに／＼しく人も思まじく候へば、てんせい、人にも申さで、上人(法然)の御事ばかりをば殿(夫君善信御房)に申て候しかば「夢には品りい數多ある中に、これぞ實夢にてある、上人(法然)をば所々に勢至菩薩の化身と夢にも見まいらす事數多ありと申うへ、勢至菩薩は智慧のかざりにてしかしながら光にてわたらせ給」と候しかども、觀音の御事は申さず候しかども、心ばかりは、その後うちまかせては思まいらせず候しなり。かく御心得候べし、

(原文の假名を真字に直して読みやすくしたのであります)

この一節は常陸の下妻に於ける惠信尼の御夢想を記されたものであります。

わが聖人が御内室や御子息たちをつれて漂泊せられたうちには、常陸の下妻のあたりにもしばらく佗居せられたことがこの御手紙でわかります。先年、下妻にまうで、小島の草庵の跡であるといふ榎のほとりから、なつかしい筑波の山を望みながら、この美しい夢をおもひ出して、聖人の御家庭の情趣を偲んだことでもあります。

なんでも堂供養の風情である、その御堂は東向にたつてゐた、神樂がひびいてゐる、そして御堂の前には立明すなはち松明が灰白くともつてゐる、その立明と御堂とのあいだに鳥居のやうなものに横に木がわたつて、繪像の佛が二鋪かけてある、一鋪はたい頭光らしく光ばかりで、佛の御容は見えない、他の一鋪ははつきりと佛の御顔があらはれてゐる。惠信尼は「この佛はどなたでござりますか」とたづねると、誰れともわからないが、その人のいふのには「あの光

ばかりでゐらせられるのは法然上人である、すなはち勢至菩薩である」といふことであつた、「それではもう一鋪はどなたでござりますか」とたづねると「あれは観音でゐらせられる、あれが御身のかしづく善信の御房（親鸞）である」といはれたのでおぼえずおどろいたときに、ふと眼がさめたそれは夢であつたといふのであります。

なんといふ美しい夢でありませうか、夢は現よりも、つよく生命を象徴することがある、いかにも浄化せられた聖人のうつくしい家庭があり／＼としのばれます。

遠美近醜といふことは地上の型である、しかるにわが聖人は近づけば近づくほどあたまのさがる尊いところがあつたやうであります。常隨昵近のお弟子であつた蓮位房は聖人を阿彌陀如來の化身であると夢み、こゝには御内室が聖人

を觀音菩薩の垂迹であると夢みてゐられる。その妻やその弟子をして、こゝろから跪づかしめ恭敬せしめられたところに聖人の崇高な人格をしのぶことができるやうである。さらに、その良人を觀音であると夢みることのできた惠信尼は魂のめざめたお方であり、聖い愛に生きられた久遠の女性でありました、家のうちにむつび親しみながら地上の愛縁そのまゝ淨化してお淨土を莊嚴することのできたお方で、いかにもめぐまれたお方でありました。ともすれば最もかなしい愛欲の謎である「家」が、そのまゝ深い信の會座として淨化せられたことをおもへば、わが聖人の家庭はほんとうにめぐまれたものであり、うるはしく調ふてゐたことがしのべれます。

惠信尼はこの夢を誰れにも物語られなかつた、殿にもかたることをさけられました、おもへば惠信尼は神祕の法悦をなつかしい沈黙のうちに抱いて、一生

をおくられたのでありました。そこに、いよく床しい惠信尼を偲ぶことができます。さはれ、言葉では表現されなかつたけれども、この夢をみられてから心のうちにては合掌しつゝ聖なる菩薩につかへるやうにかしづかれたのであつた、「觀音の御事は申さず候しかども、心ばかりはその後うちまかせては思まいらせず候しなり」と申された一節はとりわけて床しい、越後において聖人の現身にかしづける御内室は、常陸の下妻にきて、聖人の生命に新しく嫁がれた聖なる花嫁であらせられたのであります。それであるから、因縁さびしくも晩年には聖人にわかれて越後のふるさどにかへつて離愁の生活に侘びられたのであるが、つねにこうした美しい夢の追憶を縁として魂と魂とがふれ合ふてゐる法悦を内感せられたことでありませう。夢の追憶のうちには永遠に若い花嫁としての自己を享樂されたでありませう。

この夢は一生涯たれにもかたらず永遠の神祕としてお浄土まで黙つて抱いてゆかうとせられたのであらうが、今や、なつかしい夢の主人公の殿が御往生なされた、京洛にはその白骨を擁して淋しく涙をながしてゐる末の彌女をおもふとき、そこに久遠に生きたまふ聖人の本地の聖容をかたらずに居れない気分になつて、はじめて筆にあらはして物語られたのであります。

このうつくしい下妻の夢想をおもふとき、「能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃」と讃仰なされた聖人の信味をしのびます、そして「家」の煩惱がそのまゝ轉じて浄土を莊嚴すること、愛欲の「家」のうちに尊い聖化を成就されたことをしのびます。「家」の浄化と純化とを味ふに足るものであります。

久遠の家庭

教信沙彌の芳躅を辿られた愚禿親鸞は、また、聖德太子の法喜を慕はれました。そして、聖德太子は日本に應現なされた釋尊であると瞻仰して「和國の教主聖德皇」とたゞえられました。

この春の一日、私は家族のものどつれだつて、太子の御廟のある磯長の叡福寺へ参詣いたしました、大阪電鐵の太子口喜志驛に下車したときは、花ぐもりの淡い靄が河内の山々にもつれて居りました。恰度、磯長ゆきの自動車の出るところでありましたので、それに乗りますと、まもなく磯長の叡福寺の山門のまへにつきました。幼きものゝ手をひいて石の階をのぼると、きれいに掃除の行といた静肅な御境内にはうるはしい春光がながれて、古雅な堂塔伽藍の姿がなつかしくかさなり合ふて居りました。

境内の北、小高いところに樹木鬱蒼として崇高な感じを與ふるは、御墓山と

稱せられて、すなはち太子の御廟であります。宮内省の管領で、陵墓監がつゝましく給仕してゐられます。

この御陵は本来、太子のために營造せられたものでなくて、御生母の穴穗部間人皇后の御陵へ、太子と膳太郎女かたはでおはいらつめと共に御合葬せられたものであります。法隆寺釋迦佛光背の銘文によると、鬼前太后きのさき即ち間人皇后は法興卅一年（推古帝廿九年）十二月に崩御あらせられた、その翌年正月廿二日から上官法王はしひ即ち聖德太子が御病の枕につかせられた、すると太子の正妃干食王后はしひ即ち膳太郎女が御看護のおつかれで、またもや御病床につかれました、しかも、その妃が二月二十一日に薨去あらせられ、その翌日に太子が薨去あそばされるといふ御不幸がついたのであります。こうした事情から推してみると、御生母の御廟がやうやく出来あがつたところへ、太子と太子妃とが殆んど同時に薨去なされたの

で、御合葬といふことになつたのでありませう、窟内を拜見された人の記によると、中央は母后、右は王妃、左は太子の御棺を安置してあるとのことであり、これは自然なことであり、また、なつかしいことでもあります。仍つて古來、この御陵を三骨一廟と申しあげるのであります。地上の「家」にむつび合はせられた芳契を永劫の親しみふかい法縁としてもちつづけられてあるやうで、すゝろに大地にわかるゝものゝ「俱會一處」の志願が實現されてあるやうであります、この三骨一廟はまことにほろびざる「永遠の家庭」として淨化せられたこともおもふのであります。

この「永遠の家庭」はやがて、「攝化の應現」として意味づけられることゝなり、淨土三尊の一體現三といふ、なつかしい宗教感をもつて鑽仰せらるゝに至りました。

「松子傳」には廟窟偈といふものがのせられてあつて、この三骨一廟の意味をうるはしく宗教化してあります。磯長廟の傍にも、これを拜寫した享保の古碑がたつて居ります。また、淨土三尊の應現の感味に因んで、結界石には淨土の三部經を刻んであります。さて、廟窟偈といふのは次の十行二十句であります

大慈大悲、本誓願	愍念衆生、如二一子、
是故方便、從二西方、	誕二生、片州、興二正法、
我身、救世觀世音	定惠契女、大勢至、
生二育、我身、大悲、母、	西方教主彌陀尊、
眞如眞實本一體	一體現、三、同一身、
片域化緣亦已盡、	還歸、西方、我、淨土、
爲二度、末世諸衆生、	父母所生血肉身、

家

遺留勝地此廟窟

三骨一廟三尊位

過去七佛法輪處

大乘相應功德地

一度參詣離惡趣

決定往生極樂界

これは古來、太子の親撰であり、且つ御廟窟の西側に太子自ら刻みたまふた碑であると稱せられるのであるけれども、明治十二年に御廟修理にあたりて内部を拜した宮内省官吏の手記によると、かゝる碑文は現存しないとのことである、云ふまでもなくこれは傳説であります、傳説ではあるけれども、宗教的な内觀をしめすものとしてはふかく味ふべきものであります、即ち、大地の本能生活の核心は「家」である、この「家」をそのまゝ止揚して、つゐに聖化生活の應現として意味づけたのであります、更らに、太子を觀世音の垂迹とあふぐことが具體化されて、その御母后と御正妃とを統攝して淨土教の三尊思想に融化せ

られたことは風情のあることであります。こゝに、たうとい宗教の本質的な意味を擲ふことができます。大地の「家」がそのまゝ淨土教の三尊の攝化の應現として表象されたことが意味すべきことであります。

家

太子の誄歌

さききのべた磯長の廟窟偈の三尊應現の傳説は、わが親鸞聖人にとつては、親しみふかい引導の御手として感戴されたのでありました。この廟窟偈のころは康元二年すなはち聖人八十五歳のとき、大日本栗散王聖德太子奉讃といふながい和讃をもものされたるうちに

上宮太子の後妃は

御かたはらにさふらふに

君わがころのごとくにて

まことにさいはいなりけりと

われしになんその日には

きさきこたへてまうさしむ

あしたゆふべにいたるまで

かしはでの氏の夫人なり

太子かたりてのたまはく

ひとつのこともたがはねば

太子の御意にあひかなふ

おなじきあなにうづむべし

千秋萬歳いふまでも

つかへまつらんとぞおもふ

いかなるころいましてか

をはりことを令旨ある

太子みやこにまし／＼て

お浴みみぐしを洗はせて

我もろどもにこよひをば

ふしまろびぬとみへ給ふ

御顔もどのごとくにて

おんどし四十九さいなり

死を超えていよ／＼親しみの深まりゆく御家庭のありさまが歴々と味はれます。

膳の王妃が終焉のとき、水を乞はれたところが、御病氣にさはることを氣づ

かふて太子は與へられなかつた、そのうちに妃が薨去せられたので、太子は「斑鳩の富の井の水^い生^なかなくに喫^たげてましもの富の井の水」とお詠みになりました。これは法王帝説の法隆寺釋迦光背銘のうちにしるされたおん歌であります、いかにも、こまやかないもせの情愛のこもつた詠歌であります。

ところが、ある國學者のなかにはこの歌を太子のお作ではなからうと疑ふものもあるのです。その理由のひとつとしては、この御歌の内容が、さとりすまされた聖者としての太子にふさはしくないといふのであります。このお歌はまるつきり、一般の凡人が、その愛妻の臨末に欲しかつた水を與へなかつたことを、その愛妻の死んだときに後悔したといふ俗情にすぎない、太子はかゝる王妃に愛執したまふごとき俗情をすてさられたところにこそ大法に生きられた尊さがあるのでないか、ことに「生かなくに」など、名残おしげに歌はれるのはい

かにも悟りのひらけないことで、太子らしくもないといふのであります。けれども、私はかゝる國學者の見方こそ卑俗なものであるやうに感じるのです。太子が王妃を愛してゐられたことはなつかしいことであります、その最後のねがひの水をも與ふことをしなかつた凡夫の愛のかなしさをなげかれたのは、「家」に住して妻子と親しみつゝ念佛なされた太子の純情でありまして、俗情など、批議すべき筋合のものではありませんまい。私はかゝる綿々たる大地の愛情のからみつくまゝ、聖化せられた「久遠の家庭」にふかい宗教の妙趣を味ふのであります。

家を出でゝ悟をひらくよりも、家に住して救ひをよろこぶことは、さらにふかい心を掘りさげ、さらに切實な試練を経なくてはならないことを、さきにもべました。聖徳太子なればこそ深刻な宗教的試練をどげなされて、大乗佛教の

本質をさながらの大地の家のうちに生かしめられたのであります。煩惱にまみれながらも涅槃の大果をめぐまれて生きるまことの救ひを實證なされたのであります。これによつて、聖徳太子の御家庭がそのまゝ淨土三尊の應現として、大地になやめる群生へ久遠の光をあたへられてあるのであります。

聖化の内觀

さらに、さかのぼつて内観すると、すぐれた大法のめぐみ、まことの救ひの力は、この大地の謎である「家」をとほし、「家」のなやみをうけ入れつゝ、人生にしみこんできたことに気づかれます。

わが浄土教がこの地上にあらはれたのは、王舎城に於ける瀨婆沙羅王の御家庭の紆紛を機縁としてゐるのであります。父と子とのたゞかひ、母と子とのいきさつ、これらは家のなやみに外ならないのであります。しかも、この家のなやみこそ聖なる如來のみすくひのあらはれてくるなつかしい縁となりました。そこで、わが親鸞聖人は浄土教興の因縁をたゞえて「淨邦縁熟して、調達闍世をして逆害を興せしめ、淨業機あらはれて、釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり」とまうされました。また觀經和讃に仰せられました。

恩德廣大釋迦如來

韋提夫人に勅してぞ

光臺現國のそのなかに

瀨婆沙羅王勅せしめ

仙人殺害のむくひには

阿闍世王は瞋怒して

無道に母を害せんと

耆婆月光ねんごろに

不宜住此と奏してぞ

耆婆大臣おさへてぞ

闍王つるぎをすてしめて

安養世界をえらばしむ

宿因その期をまたずして

七重のむろにとぢられき

我母是賊としめしてぞ

つるぎをぬきてむかひける

是梅陀羅とはぢしめて

闍王の逆心いさめける

却行而退せしめつゝ

韋提をみやに禁じける

愛せられるだけ愛して育てゝきた阿闍世王は父の王を弑逆して王位を奪ふに

家

至りました、大地にひとりの夫を奪ふものは三界にひとりの子である、愛し合ふべきものを憎しみ合ふかない家の謎のなかに、苦しみつづけた王妃韋提希はやがてその愛兒の手によつて七重の牢獄につきおとされました、家をすてた聖者には夫もない子もない、夫があり子がある家の女主人公であつたゝめに韋提希は牢獄のどん底につきおとされました。「世尊よ、われむかし、何の罪ありてか、この惡子を生める」、曾ては享樂した家も今は呪ふべき畏でありました。

王妃韋提希は家の畏のなかにやみつづけました。

しかも、この家の畏のなかに、愛欲のなかに一生をおくられた王妃の涙のうちこそ、いみじき人生の苦惱をのぞく聖なる大法はめぐまれました、聖そのものゝ表象たる本願の名號をきゝひらいて跪いて拜む日がめぐまれました、その本願の名號のおすがたこそ、三塗の火坑におちなんとする凡夫を救ひたまふ

立撮即行のおすがたであります。

われらの朝な夕な仰ぎまつる御本尊はこの王妃韋提希の涙に濡れたまふ如來のおすがたであります、愛欲の核心としての女性、愛欲の象徴たる家、それがそのまゝ、まことの救ひを地上にいたゞく最初の聖關であつたことはかぎりなきありがたいことであり、おどろくべき神祕であります。

家は迷に沈みゆく畏であつて、そのまゝ救ひをいたゞく臺であります。

さらに、出家入山の先驅として、聖道家の人々に認められる大聖釋尊にしてほして大法を見出されたのではないでせうか、一例をあげると、華嚴經の入法界品は釋尊の救ひを内觀したものであります、そしてその求道の主人公である善財童子こそ釋尊の求道のこゝろを表象したものでありませう。そして、その

善財童子のみちびかれた善知識のなかには「佛母」がゐらせられる、「佛妃」がゐらせられる、これは注意すべきことでありませう、生れて七日にして逝ける母上も、出城の夜、わかれもつげずに見すてた愛妃も、つまり、すてゝきた「家」が、そのまゝ眞實の法界へみちびく契機であつたのではないでせうか。これまでの釋尊はたい形容が認められ、加之聖道家の人々の因襲によつて固定されてしまつてゐらせられるが、私はもつと自由な内觀によつて生命の本質をうかひひ淨土家の立場からさながらの現身佛を鑽仰したいとおもひます、かくすることによつて、釋尊をいはゆる出家の聖とのみ固執することの疎雜が見出されるかとも眼やすをつけてゐるのであります。

眞實は光る

涙骨さん

しつとりと雨がふつてゐます、雨にあらはれて高臺寺の杜の新緑があざやかに生きてゐます、いつしか初夏になりました、そして、この十二日が中外の八千號の日だとおもふと、いろ／＼のことが感じられます、とりわけてあなたの一生といふやうなことがかんがへさせられます、あなたの一生を凝とみつめてゐる私はかなりおほく語りたいたいことがあります、しかしそれはこの世での別れの日、白骨をひらふてきてはじめて述懐すべきものゝやうに考へてゐるので、いつも沈黙してきました、しかしこの八千號といふことが、何だかすこしばかりあなたのことを語つてみたい氣分にならせるのでこれをかきつけました、あなたについて思ひ浮ぶまゝをすこしばかりかきつけます、そんなことをかいてしまふか知れないが、うちつけに「眞實は光る」といつた風な感じがするので、

こんな題をつけてかきます、くだけていへば「涙骨についての雜感」といふことです。

○

最初の印象は忘れがたいものです、あなたをおもふと、いつでも最初におどづれた夜のことか思ひ浮んできます。

その夜はAさんにつれられて東山の社の二階（今は編輯室になつてゐる一部に、手狭な居室があつた）を訪れました、涙骨といふペンネームがいかにもやせこけた神経質な詩人であるらしくおもふてゐたのに、すつかり豫想がはづれて豊かな肉體と寛宏なあたゝかい性格の所有者であつたこともおのづから微笑させることでありました。しかし、話してゐるうちに中外の上に躍つてゐる生命そのものゝ象徴のやうに感じられて、かうした人がわれらの學校の先駆で

家

ある普通教校に哺まれたのかといふことが大變うれしいことでした。そして、その誠實と眞剣が最後までついてゆける人であることにつよい信頼をもたせました、それから、大分ながいことです、その時分私はまだ佛教大學の學生時代でした。今では一人前の美しい女性となられたお嬢さんが、その夜はまだうら若かつた奥さんに背負はれて、京極あたりからおもちやを買つてかへられたややさんであつたことを覚えて居ります。それを思ふと、私があなたを知つてからでも二十年ちかくなります。しかも、私の知つたのはすでに十有餘年のあいだ、いくつかの峠を越えて中外が完成されたのちでありました。

○

おもへばながいことです、ほんとうに、ながいあいだ、苦勞しぬいて下さいました。それに氣づく感謝せずに居れないころもちに迫られます。すい分

困難な經營を全く一人で背負ひきつて長い旅路をついてきて下さいました。よろこぶ日には社の同人のすべてに、知友のすべてにまで、よろこびをわかつてきたにもかゝらず、苦しむときには黙つて、すべてをひとりで背負ふて忍耐よく勇敢にすた／＼と歩いてくださいました。凡そこの世において黙つて苦惱を忍びながら尊い仕事をついてきた人は、すべての人々から感謝されてよい人であります。あなたはその感謝さるべき人の一人であります。

○

あなたの苦勞、かくれた苦勞までもすつかり知りぬいてゐる私としては、こんな風なことを感じるのは苛酷なことかも知れないのですが、それでもやはり「あなたはめぐまれたやうに幸福な人」であると感じます。

こゝに幸福な人といふことは甘つたるい意味でないことは云ふまでもありま

せん、私のいはゆる幸福とは「すべてをうちこんで働ける仕事を創造してはつきりそれを執持してゐられること」です。私はいつもこんなにかへてゐるので、身もこゝろもうちこんで働ける仕事を有つこと、一生をさゝげてすこしでもやさしいと感じない仕事を有つこと、これがためにはどんな苦しみをつゞけても遺憾はない。つまり苦勞の甲斐のある仕事をもつこと、それが人生でいちばん幸福な人だとおもふてゐるのです。こうした見地からして、私はあなたを幸福な人だとおもふのです、そして私の愛重するあなたの上に、困難であつても、そのまゝ幸福な仕事のめぐまれてゐることを感謝したい氣分になります

○

あなたは前生で大分たくさんの人たちに厄介をかけたり、泣かせたりしてきたとみえて、この世では、すいぶんたくさんの人々から泣かされたり厄介をか

けられたりしてゐられます、そしてもつとあつさやかたづけておけばよかりさうなものゝ、正當な義務だけつくしておいたらよからうと私たちが感じるときにも、あなたはやはりすべての厄介を黙つて背負こんでしまひます。そして、意外な苦勞をかさねます。

しかし、それは性格であつてどうすることもできないやうです。そのために一族一門はいふに及ばず、いろんな人々のために奉仕してゐられます。その上に、いろ／＼かなしい宿業を背負ふて人知れず泣かねばならない、所詮あなたはかなしい人です。

凡常な人では、とてもどんな仕事も手につくものでないと思はれる惱みのごん底にあつても、依然として專一に中外を念じてゐられます。瞬間もこゝろが中外からはなれないことを知つてゐます。

こうした光景をみたとき、あなたの忍苦の奉仕をたうとくおもひ仕事に對する愛のふかきに動かされます。それと同時にあなたはめぐまれてゐる、幸福なんだ、仕事そのものが生命となりきつて居る、生命のすべてが仕事に結晶してゐる、純一な生活だ。全體としての生き方だ、つまり、幸福な人だと感じて私もほつとすら安い氣分になるのです。

○

涙骨さん

あなたの年輩の人たちは、わが派においてもかなりすぐれた人々です、そのなかでもあなたは生き甲斐のある一生を享有されたことをたふとく感じます、あなたは宗派といふ殻をいつのまにやら脱けてしまつて、ほんとうに自由な生活なさいました、思ふ存分に生きられました、それは縱令、困難な道であつ

たにしろ、それがあなたの自由にえらんだみちであつたことは全くめぐまれてゐるとおもふのです。

○

そして素直にながめると、あなたはいちばん眞實な仕事を成就されたとおもふ、あなたの仕事を價值づけることは、餘他の先輩の仕事を値切る反語のやうになつてはいやであるから、くわしく具體的なことはのべませんが、あなたは人生の全局から見て、いちばん生きた仕事をなさいました。

中外といふものは全くあなたの生活表現です、こうしたことは中外に關係した同人たちの效蹟を無視する意味ではありません、それは十分にみとめます、殊に故人の眞谷七三郎氏の如き三原雪濤氏の如き、忘れてならない人々であるけれども、すべてを充分に認めてその上にすべてを高次のにしめくゝるとすべ

てがあなたに結歸します、うちわつて云へば、あなたがなかつたら中外はなかつたのです。

且つまた教界にはどれだけの新聞もできるであらうけれども、それは中外と比べることはできないのです、金と技手と器械でつくられる新聞ならば、いくらでも他にできるが、生命をもつてつくる新聞は容易にできないでせう、中外における唯一の資源はあなたの全體、身もこゝろをもうちこんだ生ける犠牲でありました。

そして、中外は明治から大正にかけての唯一の宗教新聞であり唯一の思想新聞でありました、愚なほど純一な氣質をもつてつきすゝんできた點においては一般の新聞界においても比例されるものがないかのやうであります、そして教界に於ける近代思想の母胎はまことにこの中外でありました、あなたは一生を

さゝげて決して惜しくないものを創作し成就されたのでありました。

○

こうしたことを考へてくると、あなたは最後の一日まで中外と共に生きなくてはならない約束があるのです、この斷定と強要はあなたを壓迫することは、充分に私は知りぬいてゐます、でも、私は敢て念を入れてこれをくりかへします、あなたの死んだのち、それまでをあなたに要求することは無理です、それはなるやうになります、あなたの生命の念するところはきつとほろびずに芽生えてゆきます、あなたは最後の一日まで中外と共に生きてください、あなたをどりのけて中外はかんがへられないのです、若し、できたら他のものが生れるだけです、中外はどうしてもあなたです、あなたは中外の眞實です、眞實の生命です。

いくたびかすべてをなげ出さうとせられたあなたにこうしたことを八千號の紙上でいふのは苛酷なこと、意地のわるいことこのやうですが、實はすなほに平凡な必然をつきとめていふだけのことです。

○

なんだか、くだくしくかいてゐるうちに大分なくなつた、筋みちもなく思ひ浮ぶまゝをかきつけてきた、そしてほんの一端をかいてゐるうちに大分なくなつてしまひました、語るべき大切なことを語ることをせずして、むしろ語らなくてもよいことを語つたやうでもあります。

涙骨さん、からだを大切に一日でも多く生きてゐて下さい、最後の一日まで中外を背負ふて行つて下さい、あなたの生存、それだけで充分に眞實が光つてゐることを内感します。(大正十五年五月七日)

大正十五年九月一日印刷
大正十五年九月五日發行

定價金五拾錢

著者 梅原眞隆

發行兼印刷者 京都市東山線妙法院前町
中外出版株式會社代表者

江藤 英

印刷所 中外出版株式會社

八想錄
不許複製
家

發行所

京都市東山中外日報社内
電話下座 壹七七八
振替口座 大阪六四六一七番

中外出版株式會社

關發賣所

東京市小石川區原町六番丙午出版社
振替東京一五八六八番

◇書圖兌發社會式株版出外中◇

十六大家撰 新眞宗聖典	鷲尾敦導著 惠信尼文書の研究	伊藤祐晃譯補 教行信證破壞論	大關尚之著 佛教日曜學校教案	本城徹心著 信と生活	會我量深著 地上の救主
本編五十餘書附錄眞宗要義眞宗史等最上權威	惠信尼自筆二十一通の讀方解説及び其研究	淨眞對辨の法戰と宗名事件の顛末を知る稀書	教材の豊富組織の系統等日校教師の大福音書	崇高なる著者が體驗的信仰生活の實際記録	深遠なる佛教哲理を究明せる著者独自の論集
菊半裁皮裝千七百頁 定價金五圓五十錢 送料金二十七錢	菊版布裝實物寫眞入 定價金三圓 送料金十八錢	菊版上製實眞版入 定價金二圓 送料金十二錢	菊版上裝六百五十頁 定價金三圓五十錢 送料金二十七錢	四六版美裝五百餘頁 定價金二圓二十錢 送料金十一錢	菊版布裝四百五十頁 定價金三圓八十錢 送料金二十七錢

◇書圖兌發社會式株版出外中◇

佐々木芳雄著 蓮如上人傳の研究	寺本婉雅著 新龍樹傳の研究	山邊習學著 理想と現實	加藤智學著 大聖釋尊と淨土三經	野々村直太郎著 淨土教批判	鈴木大拙著 百醜千拙
偉聖蓮如の生涯と事蹟を詳述せる一大史傳	最近佛教學界の一新發見たる特異の大研究	理想と自己と人生との活批判として好評噴々	淨教清流の本源を究明せる著者研學の結實	嚴正なる宗教批判書としての不朽的權威書	諷刺、洒脫、滑稽眞に禪味充溢せる好讀物
菊版三百五十頁上製 定價金參圓貳拾錢 送料金貳拾七錢	四六版三百五十頁 總クロース特製箱入 定價金貳圓五拾錢 送料金拾錢	四六版色絹美裝箱入 定價金壹圓八拾錢 送料金八錢	四六版上製寫眞入 定價金壹圓五拾錢 送料金八錢	四六版背クロース製 定價金壹圓四拾錢 送料金八錢	四六版二百八十頁 總布裝上製箱入 定價金壹圓八拾錢 送料金拾錢

◇書圖兌發社會式株版出外中◇

禿氏祐祥編 古代版畫集	文學博士黒田源次著 西洋の影響を受けたる 日本畫	文學士伊勢專一郎著 藝術の本質	文學士丹羽正義著 歴史學概論	文學士藤井章譯著 世界三聖の思想	名和淵海著 佛教と社會問題
支那朝鮮日本に互り稀代の古版佛畫を輯集す	浮畫、目鏡繪、長崎繪に關する特異の研究書	藝術に現れたる種々の美相を説盡せる名著	歴史學を一獨立科學として批判的に考察す	マホメット、佛陀、キリストの思想内容を説く	佛教々義を基調として社會問題を論ぜるもの
菊版古版畫八十葉解説論文附天金箱入 定價金五圓五十錢 送料金十八錢	六倍版絹裝天金箱入名畫玻璃版八十圖 定價金三圓八十錢 送料金十八錢	四六版布裝天金箱入 定價金二圓五十錢 送料金十錢	四六版布裝箱入 定價金二圓 送料金十錢	四六版總クロス箱入 定價金二圓 送料金十錢	四六版普及版 定價金一圓二十錢 送料金八錢

◇書圖兌發社會式株版出外中◇

橋川正著 日本佛教文化史の研究	手島文蒼著 印度宗教論	河瀬蘇北著 近代回教史潮	江馬務著 日本妖怪變化史	越智眞逸著 理想的な文化生活	一畫ペン光る
本邦文化の精粹たる佛教の最新史的研究	興味津々たる印度宗教に新生面を劃する名著	血湧き肉躍る三億の回教民族が一大熱血史	妖怪の變化を縱横無雙に解剖せる神祕的奇書	生の享樂愛兒の教育等文化生活熱愛者の指針	雅趣豊かな木版畫三百餘個と美しい隨筆集
菊版上製六百餘頁 定價金四圓三十錢 送料金二十七錢	菊版布裝五百頁 定價金三圓八十錢 送料金二十七錢	四六版美裝三百頁 定價金二圓 送料金十錢	菊版和裝寫眞版畫入 定價金二圓七十錢 送料金十五錢	四六版美裝四百餘頁 定價金二圓八十錢 送料金十錢	三六版絹裝天金箱入 定價金一圓 送料金六錢

佛 教 古 典 叢 書 出版 佛 典 存保

第六編	第五編	第四編	第三編	第二編	第一編
明義進行集 (河内金剛寺藏)	古本漢語燈錄 (今岡達音氏藏)	續選擇集文義要抄 (越前法雲寺藏)	法然上人傳記 (醍醐三寶院藏) 法然上人秘傳 (高野山中院藏) 法然上人ノ事 (愚觀住心作)	光闡百首 (妻木直良氏藏) 今古獨語 (鷲尾教導氏藏) 顯誓領解之訴狀	古本一言芳談 (鷲尾教導氏藏) 祖師一口法語 (西本願寺所藏)
說解 文學博士 黑板勝美	說解 宗教大學教授 今岡達音	說解 東本願寺侍童 山田文昭	說解 龍谷大學教授 望月信亨 龍谷大學教授 妻木直良 本社編輯主任 江藤滋英	說解 西本願寺 史料主任 鷲尾教導	說解 龍谷大學教授 禿氏祐祥
定價 送料 金八錢	定價 送料 金十二錢	定價 送料 金四錢	定價 送料 金八錢	定價 送料 金六錢	定價 送料 金六錢

印刷明鮮組トソイボ二十・紙和質上模和型紙半
 出揚上以枚一版真寫本原書各・存保形原=共大細

295
382

終